



## 《歌・舞・伎》をいかが？

東松山市コーディネーター  
米澤 浩

『公共ホール邦楽活性化事業』のモデル事業として東松山市を担当したのは、長唄三味線（細棹）奏者の蓑田弘大さんがリーダーとなり、笛・能管奏者の新保有生さんと長唄三味線奏者の都築かとれさんの3名で編成したチームであった。（以下、敬称は略）

この《蓑田チーム》が東松山市を担当することになったのは、東松山市民文化センター副館長の菊地俊孝氏が（一財）地域創造への派遣を受けていた時に、広島県福山市で実施された『邦楽地域活性化事業』において同チームのORとホールプログラムに立ち会われ、『公共ホール邦楽活性化事業』のモデル事業を東松山市で実施するならば「このチームで事業を行いたい」と、《蓑田チーム》に白羽の矢を立てたことから始まった。

この《蓑田チーム》が持つ「強み」はいくつか挙げられると思うが、まずはORやホール事業の軸に《歌舞伎》音楽を置いたことだろう。

《歌舞伎》は、文化庁の「全国の地芝居（地歌舞伎）調査報告書」（平成 27／全日本郷土芸能協会編纂）によれば、全国で218団体も保存活動をしている「郷土芸能」でもあるため、《歌舞伎》というものが身近な存在である市町村も少なくないのではないだろうか。

《蓑田チーム》は、この「舞踊・歌・音楽等により総合的に構成」されている《歌舞伎》を、そこで活躍する三味線や笛という楽器を通じて「音楽面」から解きほぐし、《歌舞伎》音楽を通して「日本人が育んで来た感性や表現」を紹介して行くことを意図したプログラムを構成していた。

次いで挙げられる「強み」は、リーダーの蓑田が『新潟市ジュニア邦楽合奏団（りゅーとぴあ）』で講師を務めて子ども達と触れ合う経験を豊富に持っていること、そして笛の新保が音楽の教師として教壇に立っていた経験を持つことだろう。これらの経験が、ORで小学生の前に立ち、自らの経験や自分の楽器について語り聴かせる時に大きなバックボーンとなっていた。

さて、東松山市民文化センターでは一般と学校を対象にした4本のORを計画して下さったが、その一般対象のORがホールプログラム（コンサート）のステージでも「一つの形」となり、ORとホ

ールプログラムが有機的に連動した『公共ホール邦楽活性化事業』となった。

ORの幕開けは、東松山市民文化センターの大会議室で東松山市の「茶華道連盟」の方々29名を対象として行い、同日の午後に「箭弓（やきゅう）稲荷神社」の本殿において地元の方々49名を対象に行われた。

「茶華道連盟」でのORでは、ホールプログラムで〈三味線ソロ（簗田）と華道のコラボレーション・パフォーマンス〉を行うこと等も踏まえ、アーティストの3名が華道と茶道のそれぞれの手解きを受ける時間も設けられ、「茶華道連盟」の方々とのコミュニケーションの場を持てるようにして下さったことが、〈三味線と華道のコラボ〉を行うための良い前段プログラムとなった。

一方、「箭弓稲荷神社」は1300年の歴史を持ち、これまで地元の方々が集うコンサート等の行事をあえて行わずに来ていた。今回、初めてコンサートの会場としてご本殿の場を提供して下さったのだが、お社様側でも今回の事業に向けて万全の受け入れ態勢を整えて下さっていた。

特筆したいのは、平素は神職者以外の立ち入りが許されない「幣殿」での演奏を許可して下さい、コンサートが実施できたことである。又、同お社は「七代目 市川團十郎」との縁が深く、「箭弓稲荷神社」で《歌舞伎》を軸に置いたORを実施できたことは3名のアーティストにとっても貴重な経験になったことは言うまでも無いだろう。

学校を対象としたORは、東松山市立松山第一小学校の4年生2クラスを対象に実施したが、ここでは彼らが培って来た経験値が物を言ったことはもちろんで、子ども達に語り掛ける彼らの姿勢は「親しみやすいお兄さん・お姉さん」でありながらも、ひとたび彼らが演奏モードに入ると「カッコイイお兄さん・お姉さん」に豹変する姿を、子ども達の手が届く程の距離で感じてもらうことが出来たのは「ORの肝」の一つとなった。

ホールプログラムのコンサートでは、簗田は前半を《歌舞伎》で活躍する三味線と笛の伝統音楽で、後半を三味線と笛の現代作品3曲で構成したが、オープニングに〈三味線と華道のコラボ・パフォーマンス〉を置き、これに「去来」という現代作品を選曲してきた。

「去来」という作品は、三味線のみならず色々な邦楽器に数多くの現代作品を書いた作曲家杵屋正邦が独奏三味線のために書いた作品で、文字通り三味線奏者の心に去来するものを三味線の絃に託すためにこの曲名にしたと理解しているが、三味線独奏曲の代表曲として知られている。

簗田と「その時の花と人との一期一会が大事」と語る華道家今井優峰氏とが〈コラボ・パフォーマンス〉を行うための作品として、これ以上を望めない選曲であった。

又特筆したいこととして、演奏者と華道家という「人の存在」を極力抑え、「音と花」の「その時その瞬間」に集中させた幕開けを実現するため、ホール技術スタッフの方々が本当に緻密な仕事をして下さったことをはじめとした協力・ご尽力が、ホールプログラムのコンサートを成功裏に導いた非常に大きな力となったことである。

今回の『公共ホール邦楽活性化事業』に向け、関係した各団体との調整に始まり、ORとホールプログラムを実施するためにご尽力下さった東松山市民文化センターの全てのご関係者の方々に心からの感謝と敬意を記して報告としたい。

さて最後に、この報告を最後までお読み下さった市町村ホールのご担当者の中にもお膝元で《歌舞伎》が身近な存在である方々も多くいらっしゃるのではないだろうか？

身近な「郷土芸能」としてある《歌舞伎》を、違った角度から解きほぐして「日本人が育てて来た感性や表現」を見直す一つの切っ掛けとして、《簗田・歌舞伎チーム》のORとホールプログラムをいかがだろうか？